

松と岩

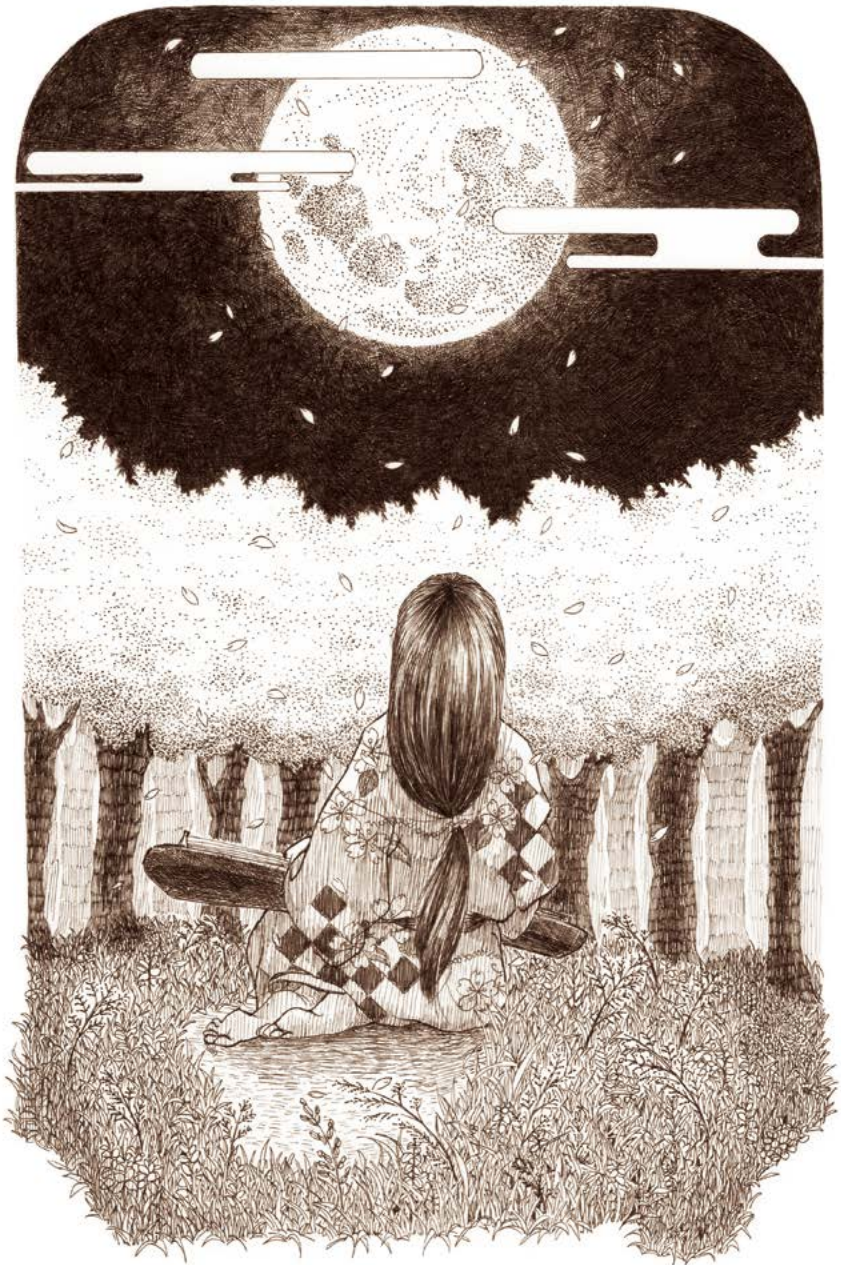
松と岩

末政 百合絵

絵：野口友美子

昔、今の千光寺の辺りには城があった。毎年春告げ鳥が歌う季節には城の周りに薄紅の桜花が咲き乱れる。城にはその桜の美しさにも劣らぬ、美しく清らかな姫がいて、人は姫を桜花の姫君と呼んで慕った。濡れたような艶のある黒髪、透けるような白い肌、桜色の頬、鈴を転がすような声、繊細な指に爪弾かれ鳴る琴の音には誰もが聞き惚れた。

この城の殿は毎年花見の宴を催し、その時は身分の高低関係なく、桜を愛で、管弦の響きを楽しんだ。飲めや歌えやと思いいいに楽しんでいる人の中で、笛の上手いひとりの男が姫の目をひいた。身なりなどを見ても決して身分の高い者ではないが、優しげな雰囲気を持つ男で、ふたりは一目で恋に落ちた。その日以降密かに姫は城を抜け出すようになり、ふたりは逢瀬を重ねていった。この



ことを知っている者が姫と相手の男以外にもうひとりいた。幼いころから城に仕えていて、姫が大変信頼を寄せている従者だったのだが、姫が城を抜け出すときはその従者が手を貸していた。

「姫様、今なら人はおりませぬ。早くこちらへ」

裏の木戸を開けると、姫の姿を隠すようにして先へ通す。

「では私はいつものように見張りをしております故、何かございましたらお呼びください」

と言う。姫は従者に礼を言うと、思い人が待つ桜の木に向かう。そうしてふたりはそこで落ち合うと、遠くの海を眺めながら語り合うのだった。どこの菓子がうまいのとか、近所の家の子どもの話とか、どんな話しても姫は喜んで聞いた。姫にとって、男のする話の全てがもの珍しいことであった。男は早くに両親と死に別れ、天涯孤独の身であった。男はあまり自分の身の上話をしたがらなかったが、昔相当苦労していたこと

が窺えた。男はよく笛を吹いてくれたのだが、その物悲しげな音色、男のみせる影に姫はますます惹かれていった。城を抜け出せなかった日は、かすかに聞こえてくる男の吹く笛にあわせて琴をひく。その切ない音はふたりの間柄を知らない者も心が震えるようなものであった。

しかしその幸せも束の間のことだった。ふたりが心を通わせるようになって一年、姫に縁談がきたのだ。こんな良縁はまたとないことだと言って殿は喜び、強く姫に勧めた。

朧月の夜だった。いつものように城を抜け出した姫は男にそれを知らせた。下を向き、ただただ涙を流す姫に、無言で彼女の話聞いていた男はその手を取って言った。

「共に逃げましょう。私が舟の準備を致します。数日後には四国の方へ渡れるでしょう。そこで私は姫とふたり、新しい暮らしを始めたい……。手



筈が整い次第、迎えに参ります。待つていてください。」

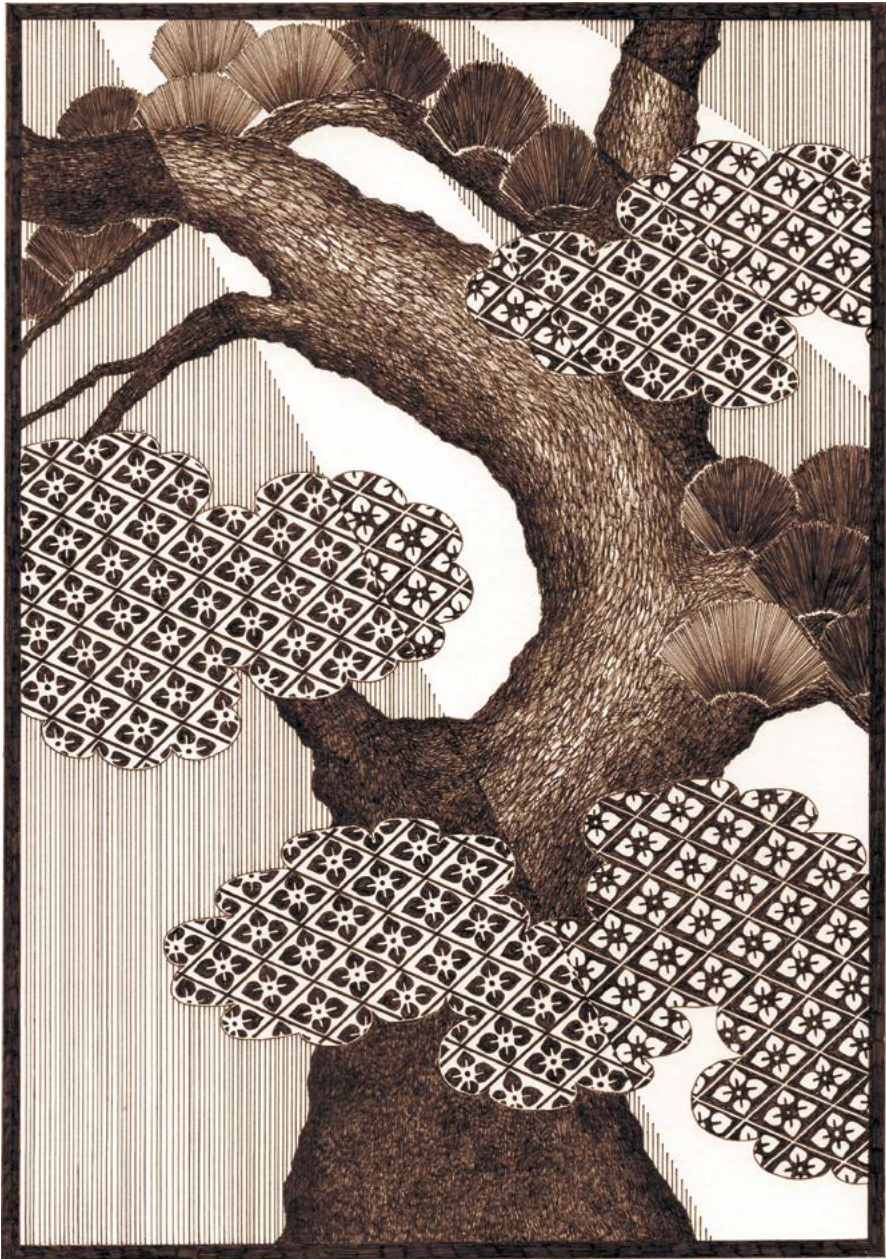
姫は喜び領いた。父を、民を捨てることになるということは分かっていた。胸は痛む。だが、その時の姫は男が一番大切だったのだ。姫は従者だけにそれを伝えた。彼は驚いた様子もなく微笑み答えた。

「遅かれ早かれ、いつかこうなることは分かっております。私に何かお力になれますことがありましたらお申し付けください」

しかし数日経っても男は来なかった。毎夜、姫は男と会っていた桜の木の前に行くが、十日たっても二十日たっても、男が現れることも、便りが来ることもなかった。ただ桜の花びらが無情に散つてゆく……。桜の木が葉桜へと姿を変える頃、やはり男の身に何かあったのではないかと思ひ、密かに従者を使いに行くと、戻ってきた従者は心苦しそうに姫に報告した。

「姫様が案じられていた男のことですが、消息がつかめません。家には姿がなく、当分帰ってきていない様子でした。隣家の者に尋ねても、誰も分からないということ……」

男の身に何かあったのか、それとも自分は男に裏切られたのか、結局何も分からぬままであった。それでも姫は待った。されど現れない男に、姫はひどく思い乱れ、遂に病に臥してしまった。縁談は日延べとなった。誰もが姫の病を悲しんだ。姫を大層可愛がっていた父親は、腕利きの医師を国中から集める。もつとも姫のその様子にひどく心を痛めたのは従者だった。ずっと側にいたのだが、姫が追い詰められてしまいう前に何かできたはずだったのだと悔い、寝る間も惜しんで身体によいものをと探しに行ったり、男の身では側で看病することもできず、姫の部屋の前でただ姫の御身を案じていたりしていた。しかし、姫は一向に良くなる気配もない。



姫の体の具合と呼応するかのように黒雲が空を覆い、雨が降り始めた。強い雨風が桜の花をさらう。それが数日ほど続いた。こんな天気続きだと、姫の身体に障る。早く止まぬものかと思ひながら、従者が外を眺めていると手桶の水を替えに行つて戻つて来た侍女の慌てた声がする。何かあつたのかと姫の部屋を開けると、部屋には乱れた布団が残つているだけで、先ほどまで寝ていたはずの姫の姿が消えていた。

その時、外が光り、雷鳴がとどろく。

従者ははつとして、外に駆け出た。姫を探し、あの桜の木のところへ向かう。きつと姫様はあの木のところにいらつしやる……しかしその木が見えるところまで来たとき、従者の足が止まる。桜の木は雷が落ちたのか、黒く焼け焦げ、見るも無残な姿に変わり果てていた。そしてその側に新しく松の木が一本立っていたのだつた。

従者がゆつくりその松に近づく。松の下に行く

と、葉から雫がひとつ落ちてきて、彼はそれを手のひらで受け止めた。

「……姫様はまだあの方をお待ちになるのですね。分かりました。では、私はいつでもお役に立てますように、姫様のお側にひかえておりましたよ」

男は優しく松を抱きしめた。すると男の身体は徐々に夜風に冷やされ冷たくなっていき、岩へと姿を変えた。朝日が山の端に顔をのぞかせた。その光はゆつくりと松と岩へとびてゆき、ふたりを照らし出した。

岩割りの松。今でも姫は男を待っている。姿を変えても。そしてその姫を岩となった男は支え続けているのだ。囃